Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-03-14

情報小論

小野, 厚夫

(Citation)
国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要,1:1-16

(Issue Date)
1994-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001129

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001129

情報小論

小野厚夫

国際文化学部を創設するに当たり、情報科学系の教官が所属する大講座の名前をどうするかについてはかなり苦慮したところであるが、結局情報論に落ち着いた。この名称は講座の実態を必ずしも表しているというわけではないので、適正とはいい難い。情報論としたのは言語論、コミュニケーション論といった、他のコミュニケーション学科の大講座名との整合性を重んじたためであり、情報学としなかったのは図書館情報学的なイメージを避けるためである。

こうした学部の創設過程の中での議論でも感じたことであるが、情報論を構成しているわれわれ理科系の教官と、他の文化系の教官との間で、講座のキーワードである「情報」という言葉についての解釈がかなり食い違っているように思える。今日使われている情報という言葉の意味は人によってまちまちであり、混乱しているといえよう。ここでは訳語として登場した情報という言葉が日本語として変遷するさまを見ながら、意味している内容とその変化について少し検討してみることにしたい。

情報の略歴

人類は大昔から巧みに情報を生活に活用しながら、これまで生きのびてきた。それだけ情報に対する依存度が高かったにもかかわらず、情報に対する一般的な認識はむしろ低かったといえよう。日本で情報という言葉が現れるのは明治に入ってからであるが、多くは軍事と政治の関わりで用いられてきた。情報が学問の対象として注目をあびるようになったのは戦後になってからのことである。

「情報」という言葉の初出については、新しく見いだされた用例が前の論文[1]に示されている。大島進[2]と音成行勇[3]も独立に調べているが、その後新しい事実は見いだされていない。明治維新後、陸軍は兵式をフランス式とし、フランスから多くの兵書を導入して翻訳し、軍人の教育にあてた。その中の一つに明治九年に酒井忠恕が訳出した『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』[4]があり、ここに「情報」という言葉が使われている。これが今までの調べて判明している「情報」という言葉の最初の用例であり、「情報」はフランス語の renseignement に充てた訳語と推測されている。

酒井が訳した演習軌典は、西南の役の後に再開された陸軍歩兵連隊の野営演習に使用され、これによって「情報」という言葉は陸軍内部に普及していった。『兵語字彙草案』[5]の表現を借りれば、情報は「物の情状に就ての報道」をいう。しばらくは情報と状報が併用されていたが、まもなく情報に統一され、主に兵語として使用された。

「情報」という言葉が一般人の目に触れるようになったのは明治二七―八年の日清戦争のときで、戦報を伝える新聞記事に情報という文字が現れる。その後はもっぱら戦争記事か、軍の公報記事に使われるだけであったが、明治三七―八年の日露戦争でかなり一般化し、国語辞典に「情報」が採用されるようになった。

第一次世界大戦およびその直後の宣伝戦で、日本は大きく遅れをとった。すでに中国でも専ら日本を敵として国民に対する抗日宣伝を科学的、統一的に行いつつあったのであるが、日本ではいわゆる「プロパガンタ」についてほとんど知識がなかった。このため情報・宣伝という新しい事務を管轄する機関として創設されたのが外務省の情報部である。このように情報を扱う機関が組織として現れる場合には、情報を収集、解析するだけではなく、情報を発表する目的で構成されたものが多い。それが発展して内閣情報局となり、諜報活動を掌ることになった。このため、情報といえば「スパイ」とか「諜報」を連想させるようになったのである。

第二次世界大戦の終了後まもなくして情報理論が産声をあげるが、日本に導入されたときに訳語に困り、しばらくはインフォメーションとかな書きされていたが、結局情報に落ち着いた。情報という言葉に対する戦時中の印象が良くなかっ

たため、この術語が社会に受け入れられるまでにかなりの時間を要したが、昭和四〇年頃から一般的に使われるようになり、今日に至っている。

情報とは何か

最初にわれわれが「情報」をどのようにとらえているのかを示すことにしよう。一番適切な表現は、高橋秀俊[6]が東京大学公開講座で「情報とは何か」という題目で講演したときの説明である。ここで高橋は、次のように述べている。

情報とは一体何かという問に、一言で答えるならば、それは「知る」ということの実体化である。つまり、われわれが、あるものについて「知る」ということは、何かしらを得たこと、何かを頭の中に取り込んだことである。その「何かしら」をわれわれは「情報」と呼ぶのである。

情報の中には、科学的な知識のように万古不易な真理としての知識も含まれるが、「いまは何時何分か」というような、本当にその瞬間しか意味をもたないような知識もまた情報である。「知識」という言葉も「情報」とかなり近い内容をもっているが、知識という場合には、普通は、言葉で表現できるような形でわれわれの脳に刻み込まれて、それを意識的に呼び起こして使うことのできるようなものに限られるのに対して、情報という場合には、眼や耳から入るすべてのものを含むはるかに広い概念と考えられている。

また、その受け取り手は、必ずしも人間とは限られない。機械が機械に情報を与えたり、また動物の体の中で、ある部分から別の部分へ、たとえば脳から筋肉へ、情報を送るというようなこともいうのである。そのような場合、「知る」という言葉は、広義に、擬人的につかわれているものと解釈する必要がある。

いま「桐一葉落ちて天下の秋をしる」という表現を例にとれば、桐の葉が落ちるという自然現象を見たときにわれわれが得たもの、すなわち自然界からの知らせが情報である。視覚を通して桐の葉が落ちたという客観的な情報を得ると、すぐにわれわれはこれまでの経緯や経験、知識などから、「そろそろ風が出てきた」とか、「秋がしのびよってきた」ことを感じ、そのように口にする。このときに連想される内容はかなり主観的なものであるが、こうした連想の過程で、われわれは得た落葉という原情報を処理したことになる。

ところが、もっと細かに見てみると、視神経が原情報として受けた落葉の映像から、それが桐の葉と認識されるまでの過程でも情報が処理されていることがわかる。このように、処理された情報もまた情報になるという、一次情報が二次情報を生み、さらに三次情報を生むところに情報の特性がある。

国語辞典における情報

「情報」という言葉がいつ頃から一般化したのかを知る一つの手掛かりは辞書である。私がこれまで調べた範囲で、兵語辞典を除く辞書の類に「情報」という言葉が現れるのは、明治三八年八月に博文館から発行された『新式いろは引節用辞典』(7)が最初である。

明治、大正時代の国語辞典に現れた「情報」の説明を羅列してみると次のようになる。

明治三八　情況を探りて報知すること　『新式いろは引節用辞典』(7)
三八　やうすのしらせ　『訂増中等作文辞典』(8)
四〇　事情のしらせ　『辭林』(9)
四〇　コトガラノシラセ　『學生必携明治辞典』(10)
四五　事情ノ報告　『大辞典』(11)

大正　元　事情を具して知らせる報知　『新式辭典』(12)
三　事柄のしらせ、情状の報知　『辭海』(13)
五　事情の報知　『國語・漢文ことばの林』三版(14)　初版は大正五年
六　事情のしらせ　『ＡＢＣびき日本辭典』(15)
七　事のやうすを知らせる報知　『ローマ字で引く國語辭典』二六版(16)、初版は大正四年
一二　事の実際のありさまの知らせ　『字源』(17)
一三　やうすの通知　『増補縮刷大字典』一七〇版(18)、初版は大正九年
一四　事情のしらせ　『廣辭林』(19)
一四　ありさまのしらせ　『大漢和辭典』(20)
事のやうすのしらせ
情況の報知

「情」は事情、情況、様子を、また「報」は報告、報知を意味するため、「情報」は「情状の報告」または「情状の報知」をつめた語句と解釈することができる。

ここで注目すべきことは、「情報」はそれまで主に兵語として使用されてきたにもかかわらず、国語辞典の記述には軍事色が感じられず、ごく一般的で、中立的な定義になっていることである。しかも、この傾向はその後も続き、今日に至っている。実際には「情報」から、噂とか評判、宣伝、諜報、憲兵、警察、言論統制といった、何となく秘密めいた、後ろ暗い言葉が連想されるにもかかわらず、そのような気配を全く感じさせない表現が最初からとられていたことに驚かされる。

これと対象的なのは中国の辞書の記述である。「情報」は日本来源の言葉であるが、辞書を見ると次のような説明文になっている。

軍中集種種報告。並預見之機兆。因以推定敵情如何。而報於上官者。　『辭源』（大正四年）[21]

軍用語。因各種報告及預兆状況等推測敵情之報告。　『辭源　續編』（昭和六年）[22]

戰時關於敵情之報告、曰情報。　『辭海』（昭和一三年）[23]

(1)　以偵察手段或其他方法獲得的有関敵人軍事、政治、経済等各方面的情況、以及対這些情況進行分析研究的成果。是軍事行動的重要依据之一。

(2)　泛指一切最新的情況報道。如：科学技術情報。　『辞海縮印本』（昭和五五年）[24]

これらをみると、移入した側の中国では明らかに「情報」を軍用語として位置づけていることがわかる。ちなみに中国では「情報理論」は「信息論」と訳されており、「情報」は使われていない。

情と状

情報という言葉には「情」という文字が含まれており、このことが情報の解釈を複雑にしている一つの要因になっているように思われる。「情」は「ありさま」とか「ようす」ばかりでなく「なさけ」を意味している。このため近年になって、情報を文字通り「なさけのしらせ」と受け取ったり、「情報とは感情がそのまま伝わるもの」と解釈した表現をしばしば見受けるようになった。前野和久の「情報とは心のエネルギーである」[25]という定義は、かなり「なさけ」に重きをおいたものである。

ところで、明治初期に「情報」という言葉が現れるとすぐに、「状報」という言葉が併用された。漢字で「情」と「状」

の意味するところは異なっており、それらは区別して使われる。漢和辞典[17]で「情状」をひくと、「情」は心の内に動くもの、「状」は心の外にあらわれるものとあり、「情」は内にかくれて外に見えないもの、「状」は外見でわかるものをさすと解釈することもできる。例えば歩兵が地形のようすを調べた報告は、「敵情」というよりは「敵状」が適している。したがって、明治の初期に「敵情の報告」を「情報」、「敵状の報告」を「状報」として区別して用いたのは当然のことといえよう。

ところが、明治二〇年代後半になると「状報」の使用頻度は激減し、「情報」に画一化されたまま今日に至っている。これは自然に淘汰されたというよりは、兵語として何らかの統一作業がなされたと見なすのが妥当であろう。兵語を統一する必然性は理解できるが、それによって微妙に意味の異なる「情」と「状」の使い分けができなくなったことは誠に残念なことであった。

今ではこうした「情」と「状」の二様の表記に対する統一が他の単語にも及んでおり、新聞などの出版界が積極的に行っている。手元にある『朝日新聞の用語の手びき』[26]と『毎日新聞用語集』[27]を調べてみると、なぜか両者とも申し合わせたように同じ記載になっている。すなわち、二様の表記が慣用されているが、その一方を統一的に使うものとして

近状、現状、国情、実情、状況、情景、情勢

が、また二様の表記のあるもので、慣用度が高いと認められる方を使うものとして

状態、政情、敵情、内情

が選択されている。これらをみると、新聞ではその言葉のもつ意味合いよりは、慣用度の方を重視して用語を統一しているように見受けられる。

こうした統語という、文化とは無縁のいわば官僚的な所作によって、「ありさま」を表わす「情」と「状」の二様の使い分けはほとんどなされなくなってしまった。したがって、現在「情」が使われているからといってそれが「情」を意味するとは単純に言い切れず、「情」と「状」の二様の解釈が可能であると理解すべきものである。ところが、現実には残った一方の表記の方が一人歩きを始め、「情報」のように「情」という文字の方が残ると、本来もっていた情状、事情、状況、様子といった意味合いとは別の「なさけ」ととる解釈が新しくでてきて、混乱をまねくようになるのである。

情報資料と情報

戦後日本では英語の information の訳語として「情報」をあてがった。このため、今では情報＝インフォメーションとしてとらえられていることが多い。例えば『広辞苑』では第二版[28]から「情報」に information という添え書きが加えられるようになったし、旺文社の『漢和辞典』では改訂版[29]から「情報」は「information の訳語」と明記されている。しかし、現在使われている「情報」は英語の information に本当に相当しているといえるのだろうか。

いま「情報」に対応する英語、独語、仏語をあげるとすれば、それぞれ次に示す単語を選ぶことができよう。

英語　information, intelligence
独語　Nachricht, Information, Intelligenz
仏語　renseignement, information, intelligence

ここに複数の単語を並べたが、「情報」に対するこれらの意味合いは少しずつ異なっている。

軍事用語では英語の information と intelligence を明確に区別して使っている。例えば『防衛時事英語辞典』[30]を見ると、information は「情報資料」で、「敵又は仮想敵に関する資料で、未だ評価・格付及び解釈を経ていないもの、これに

評価及び解釈を加えれば情報（intelligence）にもなる」と注釈がついており、一方のintelligenceは「情報」で、「外国の実情又は作戦地域に関する入手可能なあらゆる資料の収集、評価、分析、総合及び解釈によって得られるもので、軍事計画及び作戦のために直接又は潜在的に意義を有すること、又はその義務」と注釈されている。

また『英和和英最新軍事用語辞典』[31]でも同様にinformationを「情報資料」、intelligenceを「情報」と訳し、「情報資料」とは「情報（intelligence）を抽出する過程で使われるいろいろな記述の未評価の素材」で、「観察、報告、うわさ、映像、および処理をすると情報（intelligence）になるような情報資料源から引き出したものを含」んでいると説明している。

一方独語では、中沢三夫の稿本『独和軍用辞典』[32]の中に

Nachricht　は未確認情報、
Information　は情報資料（これを分析してIntelligenzとなる）、
Intelligenz　は情報（資料を審査した精度の高いもの）

という表現があり、三語は明確に区別されている。

このように、軍事関係者は英語のinformationとintelligenceを分別し、日本語では生の情報である「情報資料」と、加工された情報である「情報」とに使い分けて使用しているのであるが、このような使い分けは一般にはほとんど通用していない。

知識と情報

すでに昭和三八年に、多田和夫[33]は次のような指摘を行っている。

われわれ日本人の間では情報という言葉を2とおりの意味に使っている。まず「事実あるいはデータ」を指す言葉として使用されることがある。これは英語の information に相当する。また「事実あるいはデータに知的な処理を施した結果得られる知識」を指す言葉として使用されることがある。これは英語の intelligence に相当する。いずれにせよある知識が情報という特別な名前で呼ばれる場合は、そう呼ぶ人によってその知識に特別な関心が寄せられている場合に限られる。

確かに一般に使われている「情報」には information と intelligence の双方の意味が含まれている。例えば、ニュースで「ワシントンからの情報によれば」という場合の情報は、概ね information（情報資料）を意味している。それに対して、気象情報、求人情報などという場合の情報は、何か役に立つもの、役に立ちそうなものという意味合いで使われる。後者の場合には、すでに情報のもつ価値が評価されていて、取捨選択の上、有効と思われるものだけが集められており、intelligence（情報）に区分されるべきものである。

このように、軍事用語のいう「情報資料」と「情報」の区分をあいまいにしたまま、一つの言葉で表現していることが「情報」という言葉が混乱している一つの大きな原因になっている。それと、もう一つの大きな混乱の原因は多田の指摘にもある知識と情報の使い分けであろう。

例えば坂本晋[34]は情報を次のように定義している。

私は「情報」を「コミュニケートする内容」に限定して「人間精神の創造物」と考えてみたい。それは「知的生産物」に対する概念としての「知的生産物」である。「知的生産物」には常にオリジナリティが要求される。創造とは「考えることをベースに、新しいものを作り上げる」ことであるが、この意味で情報は「人間の創造性の産物」といってもよい。

この定義にわれわれは違和感を覚える。この例のように、人文学科や社会科学では、情報を知識あるいは知識の特定された部分をさすものと考えているらしいのである。先に高橋秀俊の表現を借りて、われわれの情報に対するとらえかたを示したが、この中で情報と知識との違いについて触れておいた。われわれは情報を知識を含む広い概念で考えており、知識または知識の一部を情報という特別な名前でよんでいるわけではない。

このように、一般に使われている「情報」という言葉は、人によって、また時によって「データ」または「資料」、加工「情報」、「知識」、「知能」のいずれかを指し、それらの区分があいまいのまま使われているために混乱を引き起こしている。

英語辞典と情報

ところで英語の information と intelligence は、いつ頃から、どのような形で「情報」という言葉と結びついたのであろうか。すでに述べたように、「情報」という言葉が国語辞典に現れるのは明治三八年以降のことであるが、それと前後して英語辞典にも「情報」という言葉が現れる。ところが意外なことには、明治および大正時代の英語辞典を調べてみると、information に「情報」は密接に対応しておらず、むしろ「諜報」という言葉が充当されているのである。

私の知る限りでは、「情報」という言葉が最初に現れる英語辞典は、明治三五年に出版されたチャーチルの英和和英兵語辞典[35]である。関連する部分を抜き書きすれば、次の通りである。すなわち、英和編には

Information	諜報
To obtain information.	間諜スル、探偵スル
Intelligence	情報
Intelligence office	外國軍情報部

State　　情報

また和英編には

諜報　Information; intelligence.

情報　A state, or tabulated report accounting for every man of a unit.

と記載されている。これを見ると明らかなように、英和では information に「諜報」、intelligence に「情報」が充てられており、英和では「情報」に information の記載がない。同じことは元田の『和英英和兵語辞典』[36] およびカルトロップの『英和和英辞典』[37] にも見られる。

一方、一般の英語辞書でも類似の記載がみられ、井上の『新譯和英辞典』[38] および佐久間、廣瀬の『和英大辞林』[39] で「情報」に充てられているのは report と advice である。

それが明治四四年に出版された堀内の『英和海軍術語辞彙』[40] で、初めて次に示すように現在に近い記述がとられ、information に「情報」が充てられている。

Information　　情報、報知・

Intelligence office, Naval　　諜報局（英海）・

Intelligence officer　　諜報主任・

しかし、明治後期と大正期においては、ほとんどの英語辞典で information に「諜報」、intelligence に「情報」が割り当てられており、今とはまったく逆の組み合わせになっている。堀内の辞書はむしろ例外的で、あるいは陸軍と海軍の用法

の違いからきているのかもしれない。ともかく、大正から昭和にかけて起ったこの逆転現象は、どのような変化に基づくものであろうか。

情報と諜報

「情報」と「諜報」はよく似た、まぎらわしい言葉である。古い年代の人々が「情報」と聞いてすぐ連想するのは「スパイ」とか「諜報」という言葉であり、今でも「情報」という言葉に、何となくうさんくさい印象をもっている人が多い。このため、「情報通」とか「情報屋」という呼び方はあまりよい意味では使われていない。

スパイと呼ばれる活動は、人間が戦を始めたときから存在しており、孫子の兵書ですでに間者が論じられている。間者、隠密、間諜、探偵の類は古くからその存在が知られており、彼らが密かに敵のようすを探って味方に知らせる「諜報」という言葉も古くから使われていた。

それに対して「情報」は比較的新しい言葉であるが、「情報」と「諜報」はどう違うのであろうか。普通「諜報」は、秘密の「情報」という意味でとらえられているが、兵語ではこれと解釈が少し異なっているようである。

昭和一八年出版の『兵語ノ戦術的説明』[41]では、「諜報」は次のように定義されている。

軍人軍隊ノ自ラ行フ視察、若クハ寫眞等ニ依ルコトナク、間諜、俘虜及住民ノ言、又ハ新聞、雑誌或ハ書信等ノ間接手段ニ依リ、敵情侯察ノ資料ヲ得ルヲ謂フ。

さかのぼって明治三六年の『野外要務私解』[42]をみると、戦時における敵情の候察を諜報勤務と捜索勤務に二分し、諜報勤務では間諜、新聞紙、捕虜などの間接手段によって情報を収集するのに対して、捜索勤務は前方に斥候を派遣するなどの手段で軍隊自ら情報を探知するものと解説している。

これらをみると、兵語でいう諜報は「密かに探る情報」というよりは、「間接的な手段によって収集する情報」を指していることになる。間諜は即席で養成できるものではないし、敵地で得た信書、新聞紙などから敵情を読みだすためには訓練を要するし、捕虜や現地人の話はそのまま鵜呑みにすることはできず、査察が必要である。したがって、諜報勤務は捜索勤務ほど単純なものではなく、高度な技術と組織力を必要とする。

同様の解釈は中薗英助の『スパイの世界』[43]にある次の記述にも見られる。

L・ファラゴーはアメリカ・インディアンにおける斥候活動と偵察活動の違いから、まずそれを説明する。原始的な物見である斥候活動を情報活動と見て、組織的で様々な手段と方法を駆使する偵察活動を諜報活動と見るのである。

ただし、ここでいう情報は前述した「情報資料」の意味であり、また兵語では捜索は、不明である敵情や地形を明らかにするためにその状況を探ることをいい、偵察とは敵状や地形などをくわしく看ることをいう。

防衛研究所の『戦史叢書』[44]では「情報勤務」を

他国の軍その他探知しようとする事物、事件に関する情報の収集、評価、判定並びにその伝達普及にあたる一切の業務を総称し、捜索勤務と諜報勤務に区分する

と定義しており、これが先の敵情の候察に対応する。ここでいう「情報勤務」の「情報」では「諜報」を包含した概念としてとらえられている。

ここに述べた「諜報」に対する一般語と兵語との解釈の相違は、古来からあった諜報という概念に対して、兵語の方は学習した西洋の兵語の、原語がもっている意味や解釈にもとづいていることからきたものと考えることができる。

参考文献

(1) 小野厚夫『明治期における「情報」と「状報」』（神戸大学教養部紀要「論集」四七巻八一頁、平成三年）
(2) 大島進『明治訳述兵書記載「状報」「情報」語と「情状」句および幕末明治渡来兵書』（「情報処理学会」平成三年度前期全国大会講演）
(3) 音成行勇『経営管理と情報の概念(2)』（七尾短期大学「七尾論叢」第三号三九頁、平成三年）
(4) 酒井忠恕訳『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』（内外兵事新聞局、明治九年）
(5) 陸軍大學校編『兵語字彙草案　巻之壹』（兵林館、明治一一年）
(6) 高橋秀俊『情報とは何か』（東京大学出版会「東京大学公開講座『情報』」三頁、昭和四六年）
(7) 久保天隨、大町桂月、太田淳軒編『新式いろは引節用辭典』（博文館、明治三八年）
(8) 森下松衛『訂増中等作文辭典』（明治書院、明治三八年）
(9) 金澤庄三郎編『辭林』（三省堂、明治四〇年）
(10) 『學生必携明治辭典』（金港堂、明治四〇年）
(11) 山田美妙編『大辭典』（嵩山堂、明治四五年）
(12) 芳賀矢一『新式辭典』（大倉書店、大正元年）
(13) 『辭海』（郁文舎、大正三年）
(14) 大町桂月監修『國語・漢文ことばの林』三版（立川文明堂、大正五年）
(15) 井上哲次郎他編『ＡＢＣびき日本辭典』（三省堂、大正六年）
(16) 上田萬年『ローマ字で引く國語辭典』一二六版（冨山房、大正七年）
(17) 簡野道明『字源』（北辰館、大正一二年）
(18) 上田萬年他編『増補縮刷大字典』一七〇版（啓成社、大正一三年）
(19) 金澤庄三郎編『廣辭林』（三省堂、大正一四年）
(20) 服部宇之吉編『大漢和辭典』（春秋書院、大正一四年）

(21)『辭源』（上海商務印書館、一九一五年）
(22)方毅、傳運森編『辭源　續編』（上海商務印書院、一九三一年）
(23)『辭海』（一九三八年）
(24)『辭海（1979年版）縮印本』（上海辭書出版社、一九八〇年）
(25)前野和久「「情報経済」とは何か」（PHP研究所、平成四年）
(26)『朝日新聞の用語の手びき』（朝日新聞社、昭和五六年）
(27)『毎日新聞用語集』（毎日新聞社、平成元年）
(28)新村出編『広辞苑』第二版（岩波書店、昭和四四年）
(29)赤塚忠、阿部吉雄編『旺文社漢和辞典』改訂新版（旺文社、昭和六一年）
(30)西村大四郎編『防衛時事英語辞典』（原書房、昭和四六年）
(31)吉原恒雄他訳編『英和和英最新軍事用語辞典』（三修社、昭和五八年）
(32)中沢三夫『独和軍用辞典』（防衛研究所図書館所蔵稿本、年代不明）
(33)多田和夫編『企業と情報』（培風館、昭和三八年）
(34)坂本普『情報社会の組織と人間』（「放送朝日」六月号八頁、昭和四一年）
(35)A・G・チャーチル『A Dictionary of Military Terms and Expressions, English-Japanese, Japanese-English』（丸善、明治三五年）
(36)元田作之進『和英英和兵語辞典』（英學新報社、明治三八年）
(37)カルトロップ『英和和英兵語辞典』（丸善、明治四〇年）
(38)井上十吉編『新譯和英辞典』（三省堂、明治四二年）
(39)佐久間信恭、廣瀬雄編『和英大辞林』（郁文舎、明治四二年）
(40)堀内長雄編『英和海軍術語辞彙』（博文館、明治四四年）
(41)斎藤市平『兵語ノ戦術的説明』（尚兵館、昭和一八年）
(42)奥田昇編『野外要務私解　第一巻』（兵林館、明治三六年）
(43)中薗英助『スパイの世界』（岩波書店、平成四年）
(44)防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書　陸海軍年表』（朝雲新聞社、昭和五五年）